ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　ここで、時は現在に戻る。

　あの爆発の後、雅也とルカリオは気絶してしまった。目を覚ました時には、ジャックはとっくにどこかへ消えていた。そして、彼等は自分達が、冒頭で述べたような状況に置かれていることに気がついたのである。

　ジャックがルカリオの攻撃でやられたとは、雅也もルカリオも思っていない。

　恐らく、気絶したのを死んだと勘違いしたのか、このまま放っておけばいつか死ぬだろう、と判断したのではないかと彼等は考えた。

「……どうしよう」

　不安そうにそう呟いて、雅也はルカリオの顔を見る。

(なあ……)

「……？」

(……いや、何でもない)

　そう言って、ルカリオは雅也から目を逸らす。一瞬、自分を見る雅也の目が現実を見ていないように感じたのだ。だが、今はそこを追求している場合では無いとルカリオは思い出す。一刻も早く、ここから降りる方法を探さなくてはならないのだ。

　彼等は同時に、下を見た。目測で十数メートルはある。とても、飛び降りれる高さでは無い。

(さて、どうする――む？)

　この状況をどうしようかと思ったルカリオだが、近くに他のポケモンの波導を感じた。しかも、一度出会ったことのある波導だ。

　一体誰かと思った矢先、その波導の正体はすぐに分かる。

「あ、カビゴン！　それに、フーディンとハピナスもいる！」

　ドタドタと走ってきた彼等を見て、そう叫んだ雅也の表情が一瞬歪みかけたのをルカリオは見逃さない。だが、やっと降りられると分かった雅也が次に作った笑顔は、不自然に明るいものだった。

　フーディンのサイコキネシスによって、安全に地面に降りた雅也とルカリオ。今にも折れそうな柱に冷や汗を流しながらも、やっと地上に足がついたことにホッとした雅也は、地面にへたりこみかける。

　だが、そんな彼を、ルカリオは腕で支えた。

　本当なら、ルカリオだって座りたい気持ちは山々だったし、雅也にも少し休んでもらいたかった。だが、今はそれを許しちゃいけないとルカリオは思う。

　自分の主人には、早く現実を見てもらわなければと思ったからだ。

　この考えは、小学一年生にはかなり残酷かもしれない。

　それでもルカリオは、ちゃんと向き合って欲しかった。

　フシギソウ達はともかく、少なくともピカチュウなら、同じことを思うだろう。

(雅也……いこう)

　頭に『？』マークを浮かべる雅也を引きずって、ルカリオは洞窟の方へと歩き出した。

　六塚の、血にまみれた死体が風にさらされている。

「……」

　ようやく現実を理解したのだろう。いや、本当は既に理解していて、どう振る舞えばいいのか分からなかったのかもしれない。

人が死んでいるのを見るのは、彼も初めてだ。

　悲鳴を上げることも、逃げることも、泣くことさえもしない彼だが、決して無感情になっている訳では無いことは明白だった。僅かに開いた唇は震え、目は六塚から離せなくなっている。

　ルカリオも当然、人が死ぬのを見たのは初めてで、心中穏やかではいられなかった。

　だが、自分が言わなければならない。ずっと一緒にいた身として、唯一人の言葉を話せる自分が、彼に言わなければならなかった。

　ルカリオは、六塚を抱えて自分の主人を見る。

(雅也……私達の手で、埋葬しよう)

　頷かないが、そのままルカリオは洞窟の方へと向かう。後ろからゆっくりとついてくる気配は感じているので、ルカリオは何も言わない。

　六塚は、さっきテレポートした洞窟の奥に埋めた。

その際、地面に穴を掘ったり、死体を穴に置いたり、その穴を埋めたりする作業のほとんどを彼にやらせた。火葬ではなく土葬だ。

ようやく終わった頃、ハピナス達の波導をすぐ近くに感じ、ルカリオは洞窟を出る。後には一人、彼だけが残った。自分で埋めた場所を、揺らぐ瞳でジッと見つめている。墓標も、お供え物も無い、本当に『ただ埋めただけ』だ。

だからこそ、これから自分の起こす行動に、彼は義務感と罪悪感を覚えていた。

勿論、その感覚が何であるか、小学生の彼には理解できるはずもない。ただただ、無意識の内に感じていただけである。

後ろに気配を感じた彼は振り返った。戻ってきたルカリオの後ろにいるポケモン達に、言わなければならないことを言うために。

「――一緒に、来る？」